

英語前置詞の典型意味論的分析

竹 鼻 圭 子

0. 序

英語の前置詞は統語的にも意味的にも大きな機能をはたしていることは周知のことである。ところが、同一の語彙であるにもかかわらず、‘He looked over the fence.’の *over* は前置詞として、一方 ‘He looked over the client.’の *over* は副詞として分析され、これらに関連づけた意味分析はこれまであまりされてこなかったようである。本論ではこれまで語彙意味論 (lexical semantics) の方法論の主流をしめてきた成分分析 (componential analysis) や 意味の場 (semantic field) 等の理論の限界を克服する理論と言われている⁽¹⁾ 典型意味論 (prototype semantics) の観点から、上記の前置詞と副詞的小辞 (adverbial particle) とを関連づけて考察してみたい。

1. 典型意味論とは

ここでは語の意味を成分分析理論や意味の場の理論ではなく、より自然構造や人間の知覚に近いと考えられる典型意味論の観点からとらえようというわけであるが、この典型的意味表示とは何であるかを Fillmore(1982) にもとづいて見ておきたいと思う。いわゆる典型的意味表示というのは、言語表現の意味をあるカテゴリーに属するための必要十分条件で示すのではなく、そのカテゴリーの典型を示し、その典型に他のものがどの程度近いかを分析することで示そうとするものであり、Fillmore (1982) によれば次の六種類の場合がある。

1. CLIMB 形 相補的な条件の離接によってあるカテゴリーが示される場合。

Climb には Clambering と Ascending の二つの条件が必要である。A monkey climbing up a flagpole. ではこの二つの条件がどちらも満たされているが、A monkey climbing down a flagpole. では clambering の意味しかない。A snail climbing the wall. とは言えるがこの場合 Asending の意味だけであり、へびが壁を降りて来る場合には Ascending の意味も Climbering の意味もないため climbing とは言えない。このように条件の一方が欠けることはできても、両方ともが欠けることはできない。

2. LONG 形 あるカテゴリーが諸条件の離接の形で示されるが、その内の一つの条件が優位にある場合で、この最優位の条件を満たす場合が基本の用法で他の場合はその基

本的用法からの派生的用法ということになる。

形容詞 **long** は空間的長さを示すのが基本であり、時間の長さを示す場合は、派生的用法ということになる。

3. **BIRD** 形 あるカテゴリーが諸条件の集合で示されるが、そのカテゴリーの **cue validity** となる要素を集めた理想像がある場合。

bird の学術的定義は **robin** も **penguin** も **ostrich** も満足させるが、一般にはこの内では **robin** が最も鳥の理想像に近いとされる。

4. **RED** 形 中心 (**target**) のまわりの一定の領域として各々のカテゴリーが定義され、それらのカテゴリーが一つの集合を形成している場合。

色の名がよい例であり、同じ **red** で示される色でもいろいろな色がありうる。

5. **BACHELOR** 形 あるカテゴリーが諸条件の集合で示されるが、典型的な背景があってはじめて用いられる場合。

bachelor は未婚の成人男性として定義されるが、結婚や結婚可能な年令についての何らかの前提のある人間社会で用いられる名詞である。長く同棲している男性や、ジャングルで成長した男性やパウロ二世を **bachelor** とはふつう言わないだろう。このように典型意味論の観点からすれば、上記の例の男性たちを **bachelor** と言うべきか否かというようなことが重要な問題になるようなことはなくなってくるのである。

6. **DECEDENT** 形 あるカテゴリーが諸条件の集合で示されるが、その典型的用法は、話者がそのカテゴリーに特殊な名前が与えられるような行為に従事している時であるような場合。

たとえば **decedent** という語は遺産相続などに関係する法的な場面で用いられる。

以上の六種類の内での議論に最も関連のあるのは2と3の場合である。たとえば同じ *up* という語が、本来の空間的意味からある種の動詞と結合することで第2の **Long** 形的により抽象的な意味を持つようになる。そしてその動詞—*up* の結合自体も第2の **Long** 形的によりイディオム性の高い意味を持つようになったり、動詞₁、動詞₂、動詞₃…とといったいくつかの動詞の意味の関連性から、動詞₁—*up* を典型としたいいくつかの結合が第3の **Bird** 形的に一つのカテゴリーをなすようになったりするのである。こういった点について次の2節、3節でくわしく観察してゆきたいと思う。

2. 前置詞から副詞へ

この節では前置詞の基本的用法と思われる空間の意味を **Bennett (1975)** にもとづいて分析し、そこから一般に動詞小辞結合⁽²⁾ と呼ばれているものの構成要素として副詞的に働

く場合の意味がどのように派生されるのかを観察し、その関係が前節で述べた第2のLong形の特徴を持つことを示したい。英語には数十の前置詞があるが、その内でも副詞的小辞としても比較的多く用いられる *away*, *down*, *in*, *off*, *on*, *out*, *over*, *up* をここではあつかうことにする。

away

前置詞 *away* を含む文(1a)の意味表示は、(1b)のようになる。

- (1)a. Trevor went away from London.
 b. [Trevor [go [[S[L London place]] [G[L some place]]]]]
 (S : source, P : path, G : goal, L : locative)

このように一般に *away* は goal locative some place と意味分析される。

この goal locative some place という意味は *away* が副詞的に用いられる場合でも幾分かの抽象化はされるものの、そのまま生きているようである。このことは次に挙げる例からも明らかである。

- (2)a. The voice of the singer faded away.
 b. The car drove away.
 c. Mary cleaned away the pieces of paper.
 d. Mother cooked away the meat.
 e. She always puts away her winter clothes when spring comes. (Hill(1968))

それぞれの意味表示は(2')のようになる。

- (2')a. [The voice of the singer [fade [G[L some place]]]]
 b. [The car [drive [G[L some place]]]]
 c. [Mary [clean [G[L some place]] the pieces of paper]]
 d. [Mother [cook [G[L some dish]] the meat]]
 e. [She [put [G[L some storage]] her winter clothes]]

down

前置詞 *down* を含む文(3a)の意味表示は(3b)のようになる。

- (3)a. The dog has just run down the stairs.
 b. [The dog [run [G[L lower place]] the stairs]]

このように一般に *down* は goal localive lower place と意味分析される。

次に *down* が副詞的に用いられる場合を見てみると(4)の場合には下方への運動をする

のは目的語の *meat* ではあるが、前置詞として用いられる場合の意味をそのまま持っている。

- (4) John swallowed down the meat.

[John [swallow [G[L lower place]] the meat]]

また次の例では *rub* という行為によって馬がもとの状態にもどることが認識的には下方への運動としてとらえられるものと思われる。

- (5) The horses have to be rubbed down after the race.

[The horses [be rubbed [G [L lower : usual state]]]]

また心の状態が沈んでいることも下方への運動としてとらえられる。

- (6) This music is getting me down.

[This music [get [G [L lower : lower state of mind]] me]]

そして、紙などに書きとる動作も下方への運動としてとらえられる。

- (7) Copy this sum down from the blackboard.

[Copy [G[L lower : on paper]] this sum]

in

前置詞 *in* を含む文(8a)の意味表示は(8b)のようになる。

- (8) a. Mary is in the super market.

b. [Mary [be [L interior] of the super market]]

このように *in* はふつう *locative interior* と意味分析されるが、副詞的に用いられる場合には *goal locative interior* となることが多い。たとえば次例は会話というものが一つの領域を持つ空間のようにとらえられ、そのなかへ割って入ることを意味する。

- (9) He butted in on the conversation.

[He [but [G[L interior]] of the conversation]]

また次例ではその人の住まいの内をのぞく意味からちょっとした訪問の意味が生まれる。

- (10) Will you look in on Mrs. Jones when you are passing her house.....(Hill)

[You [look [G[L interior (of the residence)] of Mrs. Jones]]]

そして次例では(11a)は(11b)のように助格副詞句を持つ形が本来の形と考えられ、あるもので囲われた内部にという意味が生まれる。

- (11) a. He screened in the porch with the finest wire-mesh.

b. He closed in the porch with the finest wire-mesh screen.

[He [close [G[L interior]] the porch] with the finest wire-mesh screen]

off

前置詞 *off* を含む文(12a)の意味表示は(12b)のようになる。

(12) a. The book fell off the shelf.

b. [The book [fall [G[L off]] the shelf]]

このように *off* は goal locative off (=separation from being attached) と意味分析されるが、この意味は副詞的に用いられる場合でも次例のような場合にはそのまま残されるようである。

(13) She cleaned the debris off of the sofa.

[She [clean the debris [G[L off]] of the sofa]]

また次例では仕事から離れて自由になることが離れていく運動としてとらえられている。

(14) We go off at 6.

[We [go [G[L off (from a state of activity)]]]]

次例のようにある行為を完全に行なってしまうことが離れて行く運動としてとらえられることも多い。

(15) All the children in the village were killed off by the disease. (Hill)

[All the children in the village [be killed [G[L off (=completely)]] by the disease]]

そして次例では(16a)は(16b)のように助格副詞句を持つ形が本来の形と考えられるが、その囲い内に何も入れないで離しておくという意味になる。

(16) a. The police will block off the street.

b. The police will close off the street with blocks.

[The police [close [G[L off]] the street] with the blocks]

on

前置詞 *on* を含む文(17a)の意味表示は(17b)のようになる。

(17) a. The book is on the table.

b. [The book [be [L [surface of the table]]]]

このように前置詞 *on* は locative surface と意味分析されるが、副詞的に用いられる場合には(14)に例示した *off* の用法の反意語として用いられることが多い。

(18) a. He turned off the light.

[He [turn [G[L off (from the state of activity)]] the light]]

b. He turned on the light.

[He [turn- [G[L off]]] the light]]

そして *on* のこれ以外の副詞的用法は次例に示すように非常にイディオム性が高いようである。

- (19) a. I didn't quite *catch on* (=understand).
- b. Our dining-room *gives on* (=face towards the garden).
- c. I *count on* (=trust) you to help us.
- d. You musn't *let on* (=reveal) that you know who took it.

out

前置詞 *out* を含む文(20a)の意味表示は(20b)のようになる。

- (20) a. Mary went out of the kitchen.
- b. [Mary [go [G[L exterior of kitchen place]]]]

このように *out* は goal locative exterior place と意味分析される。

この外へ向かう運動の意味は *out* が副詞的に用いられる場合にも生きているようである。

たとえば(21)の場合は船出を意味し、事実船が港から外へ向かう運動がある。

- (21) Columbus set out to find a new way to India. (Hill)
- [Columbus [set [G [L exterior place (of a port)]]] to find a new way to India]

また次例では大声を出すことが外へ向かう運動としてとらえられている。

- (22) She shouted out for help.
- [She [shout [G[L exterior place]]] for help]]

次例ではふくれていく様子が外へ向かう運動としてとらえられている。

- (23) His foot swelled out like a foot ball.
- [His foot [swell [G[L exterior place]]]]

次例ではすたれていく様子が外へ向かう運動としてとらえられている。

- (24) This custom is dying out in this country.
- [This custom [be [G[L exterior (of being current)]]]]

次例では所有物が引渡される行為が外へ向かう運動としてとらえられている。

- (25) The manager handed out presents to all his staff.
- [The manager [hand [G[L exterior (=all his staff)]] presents]]

次例では何かをはき出す行為が外へ向かう運動としてとらえられている。

- (26) He brushed out the room.
- [He [brush [G[L exterior of the room]]] something]]

次例では(27b)のように助格副詞句を持つ形が本来の形と考えられるが、見える状態から消し去る行為が外へ向かう運動としてとらえられている。

- (27) a. The clerk penciled out the entry.
 b. The clerk crossed out the entry with a pencil.
 [The clerk [cross [G [L exterior (of being visible)]]] the entry] with a pencil]

over

前置詞 *over* を含む文(28a)の意味表示は(28b)のようになる。

- (28) a. My hand is over the table.
 b. [My hand [be [L [superior of the table] place]]]

このように *over* はふつう locative superior と意味分析されるが、副詞的に用いられる場合には path locative superior あるいは goal locative superior となるようである。たとえば次例では財産がひき渡される様子が何かを越えていく動きととらえられている。

- (29) The old man deeded over the estate.
 [The old man [deed [P[L [superior] place]]] the estate]]

そして例(30)では最後まで読み切る様子が上を越えてゆく動きとしてとらえられている。そしてこういった用いられ方から例(31)などでは視察する意味が生まれてくる。

- (30) She read the letter over carefully.
 [She [read [P[L [superior of the letter] place]]]]]

- (31) He went over the hole story again.
 [He [go [P[L [superior of the story] place]]]]]

また次例では(32b)のように助格副詞句を持つ形が本来の形であると思われるが、上をおおう動きが越えていく動きとしてとらえられている。

- (32) a. They boaded over the hole.
 b. They cover over the hole with a board.
 [They [cover [G[L [superior of the hole] place] with a board]]]

up

前置詞 *up* を含む文(33a)の意味表示は(33b)のようになる。

- (33) a. John walks up the hill every day.
 b. [John [walk [G[L [higher] place]]] the hill]]]

このように *up* は **goal locative higher** と意味分析されるが、副詞的に用いられる時には非常に比喩的な意味が強くなり、様々な意味を持つようになる。このため *up* は副詞的小辞の内でも最も生産性が高い。なかでも *up* が終着点へ向かう動きを示す動詞小辞結合は意味のつながりがおかしくない限り、ほとんどの動詞がその構成要素となりうる。

- (34) a. You will have to fill up some forms to get your passport.

[You [fill [G[L [the end]]] some forms]]

- b. I am going to polish up all the silver this afternoon.

[I [polish [G[L [the end]]] all the silver]]

この *up* の持つある行為を完全にやってしまうという意味がある種の動詞の持つ、物をくたく意味とつながると、こまかくくだいてしまう意味が生まれる。

- (35) The bomb blow several houses up.

[The bomb [blow [G[L the end (=pieces)]] several houses]]

また同様の意味がある種の動詞の持つ、集めるという意味とつながると、何もかも集めてしまうという意味が生まれる。

- (36) He had to gather up all the tickets he had given out by mistake. (Hill)

[He [gather [G[L the end]]] all the tickets]]

他に、暗い状態が明るくなったり、精神的に明るくなったり、より良い状態になったりというふうな、一般の通念からすれば負から正へ向かう動きが *up* の持つ上方への動きにたとえられる。

- (37) a. He had to turn all the gas-lights in the street up.

[He [turn [G[L higher (=blight state)]]] all the gas-lights]]

- b. Keep your spirit up ! We are nearly there.

[Keep [G[L higher (=cheerful state)]]] your spirit]

- c. Things are looking up.

[Things [look [G[L higher (=prominent state)]]]]

このように前置詞本来の位置関係を示していた意味は、副詞的に用いられる場合にも抽象度、比喩度のちがいはあっても、強く残っており、典型意味論的には第2番目の **Long** 形的特性を持っていることが明らかになったと思う。

3. 動詞小辞結合の典型意味論的分析

前節では前置詞と副詞的小辞の間には典型意味論上第2の **Long** 形的関連があることを示したが、この節ではそのようにして脈生された小辞の一つの意味を中心にいくつかの

動詞小辞結合が一つのカテゴリーをなしており、それは第3の Bird 形的な典型を持っていること、そして一方では一つの動詞小辞結合が第2の Long 形的にイディオム性、抽象性の高い多くの意味を脈生してゆくことを示したいと思う。

3.1 Bird 形的典型

ここでは第2節での前置詞の意味分析にもとづき、動詞小辞結合の Bird 形的典型をさぐってみたい。

away

前置詞 *away* は *goal locative some place* と意味分析されたが、これが副詞的に用いられる場合には多くの動詞小辞結合の中で次の3つのタイプが Bird 形的典型を持つものとして考えられる。

(38 i) brush (away), clean, rub, sponge, sweep, wipe,

ii) bake, boil, cook, grind, skim,

iii) cache, bank, lay, put, store, stow,

(38 i) の場合の典型は *clean away*, (38 ii) の場合は *cook away*, (38 iii) の場合は *put away* と考えられる。そして (38 ii) のタイプでは(39)に見られるようなよりイディオム性の高い表現も生まれている。

(39) a. She stashed away her jewelry.

b. Those who salt away a little money each month never have to borrow in a time of need.

down

前置詞 *down* は *goal locative lower* と意味分析されたが、これが副詞的に用いられる場合には次の5つのタイプが Bird 形的典型を持つものと考えられる。

(40 i) chug (down), drink, gulp, swing, swallow, wolf,

ii) oil, pat, rinse, rub, scrape, scrub, smooth, tamp, tap, wipe,

iii) baton, bolt, button, cement, clamp, fasten, glue, nail, paste, pin, river, screw, staple, tack, tape,

iv) copy, jot, mark, write,

v) break, calm, close, cool, get, quiet, simmer, tear.

各々の典型は(40i)では *swallow down*, (40ii)では *smooth down*, (40iii)では *fasten down*, (40iv)では *write down*, (40v)では *get down* と考えられる。前節で述べたように(40ii)は表面を平らにする意味, (40v)では静まる様子の意味になる。また(40iii)では動詞が本来次に示すような助格副詞句の要素であったと考えられる。

- (41) a. The craftsman fastened down the board with nails.
- b. The craftsman nailed down the board.

in

前置詞 *in* は locative interior と意味分析されたが, これが副詞的に用いられる場合には goal locative interior となることが多く, 次の3つのタイプが Bird 形的典型を持つと考えられる。

- (42i) box(in), close, fence, glass, pen, rope, screen, wall,
- ii) break, butt, chime, forn, set, work,
- iii) home, narrow, zero.

(42i)ではその典型は *close in* であり, ここに挙げられた動詞は前節で述べたように助格副詞句の構成要素であったと考えられる。しかし, こういった動詞小辞結合が比喩的な意味を持つ場合には助格副詞句を持つような意味解釈はなりたたない。

- (43) a. The enemy tried to box in our force.
- b. *The enemy tried to close in our force with a box.

(42ii)ではどれもじゃまをする意味になるが, 典型は *break in* と考えられる。こういった動詞小辞結合はしばしば前置詞 *on* をともなう。

- (44) a. He butted in on the conversation.
- b. She chimed in on the discussion.

(42iii)では *narrow in* を典型として, どれも焦点をあわせる意味になり, 時には前置詞 *on* をともなう。

- (45) This missile will home in on any warm object.

off on

前置詞 *off* は goal locative off と意味分析されたが, 副詞的に用いられる場合には次の4つのタイプが Bird 形的典型を持つと考えられる。

- (46i) bump (off), finish, goof, kill, knock, murder, polish,
- ii) blast, charge, dash, go, rush, set, start, take,

- iii) block, board, chain, clamp, cordon, dam, rope, wall,
- iv) brush, chip, clean, hose, mop, rinse, sand, scrape, scrub, shave, sponge, wash, wear, wipe.

(46 i)では *finish off* を典型としてある行為の完成を意味するように思われる。(46 ii)では *go off* を典型として出発の意味を持つと考えられる。(46 iii)では囲いの内へ入ることを防ぐ意味になり、前節(16)で述べたように各々の動詞は本来助格副詞句の構成要素であったと考えられ、*close off* を典型とする。(46 iv)は *clean off* を典型とし、(47 b)は方向を示す副詞句が省略されたものと考えられる。

- (47) a. She cleaned the debris off of the sofa.
- b. She cleaned the debris off.

しかし、(38 i)の *clean away* の場合とはちがって(48)にあるような文もある。

- (48) a. She cleaned off the sofa.
- b. She cleaned the sofa off.

on が副詞的に用いられる場合、Bird 形的典型を持つのは前節でも触れたように、*off* の反意語である場合のみである。次のような例が挙げられる。

- (49) flick on, flick off, leave on, leave off, snap on, snap off, switch on, switch off, turn on, turn off.

out

前置詞 *out* は goal locative exterior place と意味分析されたが、副詞的に用いられる場合、次の8つのタイプが Bird 形的典型を持つものとして挙げられる。

- (50) i) argue (out), close, hear, play, roud, think,
- ii) move, peel, set, ship, start, strike,
- iii) bawl, bellow, call, chew, curse, cuss, ring, shout, yell,
- iv) broaden, draw, flatted, lengthen, spread, stretch, widen,
- v) die, fade, fizzle, peter,
- vi) give, hand, lend, pass, pay, serve, throw, toss,
- vii) brush, clean, comb, dig, dry, empty, rake, rinse, scrub, sweep, wash, wring,
- viii) chalk, crayon, cross, ink, paint, pen, pencil.

(50 i)ではある行為の完成を意味し、この場合、どれが典型であるか明示できないが、多くの動詞小辞結合がこのカテゴリーに属する。(50 ii)は離れていく行為を示し、*move out* 等が典型と考えられる。(50 iii)では *yell out* 等が典型と考えられよう。(50 iv)ではひろげたりのぼしたりする行為が示されるが、*spread out* や *stretch out* が典型と考えられ

る。(50v)では消えていく様や、すたれていく様を示されるが、*die out* や *fade out* が典型と考えられる。(50vi)では何か物の受け渡しの様子が示され、典型は *give out* と考えられる。(50vii)では *clean out* 等が典型と考えられ、(51)に示した4つの形の文が可能であり、これは(47)、(48)にあった *clean off* の場合とよく似ている。

- (51) a. He brushed the stuff out of the room.
- b. He brushed the stuff out.
- c. He brushed out the room.
- d. He brushed the room out.

(50viii)では *cross out* を典型とし、前節(27)で示したように、これらの動詞は本来助格副詞句の構成要素であったと考えられる。

over

前置詞 *over* は locative superior と意味分析されたが、副詞的に用いられる場合、次の3つのタイプが Bird 形的典型を持つものとして考えられる。

- (52) i) deed (over), fork, give, hand, pass, turn,
- ii) board, brick, cement, glass, mortar, wall,
- iii) build, fix, get, go, hold, look, make, pick, read, sort, work.

(52i)では *give over* を典型とし、物が受け渡される様子が示される。この場合、*over* がある場合とない場合とでは次に示すような文法的ちがいがある。

- (53) a. The old man deeded over the estate.
- b. *The old man deeded the estate.

つまり、*over* がある場合には間接目的語は必要ないが、*over* が無い場合には間接目的語が必要となるのである。両方の文に *to the police* 等の間接目的語をつけ加えれば、両方とも文法的な文になる。これは、*over* のある文では受け渡しの行為自体に焦点がおかれるためと思われる。(52ii)では *cover over* を典型とし、前節(32)で示したようにこれらの動詞は本来、助格副詞句の構成要素であったと考えられる。(52 iii) では *get over*, *go over*, *make over* などが典型と考えられ、*over* は行為のくり返しや、全体を完全にという意味を示す。

up

前置詞 *up* は goal locative higher と意味分析されたが、副詞的に用いられる場合、前節でもふれたように最も生産性の高い小辞であり、特にある行為を完成する意味になる

場合が最も生産性が高く、次のような例が挙げられる。

(54) beat (up), bunch, churn, coil, mix, shake, trap

この他に次の4つのタイプが Bird 形的典型を持つものとして考えられる。

(55 i) back (up), bolster, brace, buoy, buttress, prop, shore,

ii) beef, brighten, build, cheer, pep, perk, pick, spruce,

iii) ball, botch, bung, butchen, garble, goof, mess, muss, twist,

iv) crunch, grind, rip, saw, scrunch, slice, tear.

(55 i)では後見の意味を示し, *back up* 等が典型と考えられる。(55 ii)では明るくする意味が示され, *brighten up* や *cheer up* 等が典型と考えられる。(55 iii)では混乱させる意味が示され *mess up* 等が典型と考えられる。(55 iv)では小さくくたく意味が示され, *tear up* 等が典型と考えられる。

3.2 Long 形的典型

ここでは一つの動詞小辞結合が Long 形的に脈生されたいくつかの意味を持つことを観察してみたい。一つの動詞小辞結合が多くの意味を持ちうることは次の *make up* の例からも明らかであり, *take up*, *set up*, *get up*, *put up* など多くの意味を持つ。

(56 i) to compose, to compile 例 make up a story.

ii) to constitute 例 water is made up of two elements.

iii) to wrap up 例 make up the package neatly.

iv) to arrange 例 make up the bed.

v) to complete 例 make up the deficit.

vi) to paint 例 make up his face for the play.

vii) to reconcile 例 the lovers made up.

viii) to decide 例 make up ones mind.

ix) to make a play for 例 make up to the attractive woman.

そしてこういった動詞小辞結合の意味にはイディオム性の低いものと高いものがあるようである。イディオム性の低いものには次例にもあるように比喩的な意味を持つものとしてとらえられる。たとえば,

(57) Sick people may throw up.

この文では *throw up* は vomit の意味であるが, 事実吐く時には食物が上がってくるわけであり, この比喩的な意味が *throw up* から伝わってくる。次に挙げるような動詞小辞結合はこれと同じような特徴を持っている。

(58) a. The soldiers were only *carring out* the orders.

b. *Eat your dinner up* !

よりイディオム性が高い場合には次例のように非常に特殊な意味解釈を持つようになる。

(59) a. John has *fallen out* (quarreled) with his girl-friend.

b. I can't *make out* (understand) this word in the letter.

c. I *give up* (abandon). What is the answer ?

こういった場合には(60)にあるように動詞が単独で用いられる場合には全くちがった意味解釈を持つことになる。

(60) a. They cracked the case with the hammer.

b. She really *cracked up* (praised) at my jokes.

このように一つの動詞小辞結合は動詞と小辞それぞれの意味を加えることで生まれてくる意味を典型として、Long 形的に多くの意味を脈生してゆくことが観察される。

4. 結び

本稿では典型意味論の立場から、一般に前置詞と副詞的小辞とに区分されているものに意味的関連性があること、そして動詞小辞結合の持つ多くの意味機能にも典型意味論的関連があることを示した。ここでは第2節、第3節であつかった動詞小辞結合そのものの意味の広がりをも十分に観察できなかったが、be 動詞はじめ、他の生産性の高い動詞からなる動詞小辞結合を中心にこの方面での考察をすすめてゆきたい。

注

- (1) こういった点については Verschueren (1981) 参照。
- (2) ここでいう動詞小辞結合 (verb-particle combination) とは動詞と前置詞とが一つの動詞のような働きをする場合のことであり、他に句動詞、複合動詞、動詞副詞結合、動詞前置詞句等と呼ばれているものである。

参 考 文 献

- Bennett, D.C. (1975) *Spatial and Temporal Uses of English Prepositions*, Longman.
Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*, Harvard University Press.
Fillmore, C.J. (1982) "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis", *Speech, Place and Action* R.J. Jarvella and W. Klein (eds.), John Wiley & Sons.
Fraser, B. (1974) *The Verb-Particle Combination in English*, Taishukan.
Hill, L.A. (1968) *Prepositions and Adverbial Particles*, Oxford University Press.
市河三喜 (1948) 「英文法研究」研究社。
Jespersen, O. (1933) *Essentials of English Grammar*, George Allen & Unwin.
Kennedy, A.G. (1920) "The Modern English Verb-Adverb Combination", *Language and Literature*, Stanford University Publication, University Series, Vol. 1, No. 1.
小西友七 (1970) 「英文法研究」大修館。

英語前置詞の典型意味論的分析

Lindner, S.J. (1983) *Lexico-Semantic Analysis of English Verb Particle Constructions with 'Out' & 'Up'*, IULC.

Poutsma, H. (1926) *A Grammar of Modern English*, P. Noordhoff, Part II, Section II.

Verschueren, J. (1981) "Problems of Lexical Semantics", *Lingua* 53.